

# 洛陽北魏陶俑の成立とその展開

小 林 仁

## はじめに

北魏時代は中国彫塑史において新たな局面を迎えた重要な時期であったといえる。とりわけ、雲岡や龍門など中国を代表する石窟寺院の造営が開始されたことに象徴されるように、仏教造像が活況を呈した時代であった。一方、古来より連綿とつづいてきた中国独自の彫塑芸術である俑の歴史においても、北魏時代は西晋時代以降、停滞気味であった俑の製作がにわかに活発となり、それに伴い後の隋・唐時代にまでつづく新たな規範の基礎が形成された重要な時期であったといえる。仏教彫塑と俑、両者はそれぞれ全く異なる目的の下につくられたが、同時代の造形芸術という点で共通する要素も少なくない。したがって、北魏時代の彫塑芸術を考える上で、仏教彫塑とともに俑は重要な意義をもっているといえることができる。本稿では、北魏でもとくに洛陽遷都後の陶俑を中心に、その成立と展開について考えていきたい。

## 1. 北魏洛陽遷都以前の北魏陶俑

洛陽北魏陶俑の成立を考える前に、まず洛陽遷都以前、すなわち一般には北魏前期と区分される時期の陶俑の実体を把握しておく必要がある。周知のとおり北魏孝文帝が太和18年(494年)洛陽に遷都するまで、北魏の都は平城、すなわち現在の山西省大同にあった。この北魏平城時代(398-493)の仏教芸術は有名な雲岡石窟に集約されるが、陶俑では延興4年(474年)から太和8年(484年)とされる司馬金龍夫妻合葬墓(以下、司馬金龍墓とい



う) 出土の計367体に及ぶ一群がこの時期の代表としてよく知られている<sup>1)</sup>。司馬金龍墓出土の陶俑は基本的には前後2枚の合わせ型による製作、すなわち「合模制」<sup>2)</sup>で、頭部と体軀が一体の型でつくられている〈図1〉。さらに、低火度鉛釉が施されているという点、司馬金龍墓の陶俑は陶磁史的にも早くから大変注目されている資料である。ほとんどの俑が胡服を着ていることや、豊かな童子を彷彿させる人物表現など随処に鮮卑文化が濃厚に反映されており、さらに雲岡石窟(第13窟など)の世俗供養者像と共通の造形感覚を見せている点も興味深い。

近年、大同では太和元年(477年)の宋紹祖墓が発見され、115体の陶俑と獣面形鎮墓獸1体が出土した<sup>3)</sup>。その出土数は司馬金龍墓には及ばないものの、少なくとも100体以上の大量の陶俑を副葬することがこの時期にすでに一般化していた可能性を物語る。施釉の有無の別はあるとしても、宋紹祖墓出土の陶俑は司馬金龍墓の陶俑と明らかに同一の造形様式を見せていることから、北魏平城時代、とくに孝文帝の太和年間における陶俑の統一様式ともいべきものがここに明らかになった〈図2〉。そして、いみじくも平城時代の陶俑と後に述べる洛陽遷都以後の陶俑の様式的な相違はこれによって決定的になったということができよう。もちろん両者には牛車を中心とした出行儀仗や鎮墓俑の存在など、俑の構成や種類といういわば喪葬制度の点においては基本的な一致も見られることから、影響関係が全くなかったわけではない。しかし、少なくとも洛陽遷都後の陶俑が平城時代の北魏俑から造形表

現の点において直接的な影響を受けなかったことは明らかである。したがって、洛陽陽北魏陶俑がどのような造形的背景をもって成立したのかということが一つの大きな問題といえる。

そこで次に洛陽北魏陶俑に関する先行研究を概括しながら、具体的な問題点を整理したい。

## 2. 洛陽北魏陶俑に関する先行研究

20世紀初頭、清末民国の考証学者・羅振玉 [1866-1940] によって俑をはじめとした明器が考古資料及び美術品としてはじめて価値を認められたことはつとに知られている。当時、汴洛鉄道（開封と洛陽を結ぶ中国最初の鉄道）の敷設工事に伴い洛陽一帯の古墓から唐三彩をはじめ多くの文物が出土した。その中には北魏時代の陶俑も含まれていたようで、その後の盗掘によるものも含めそれらの一部が欧米や日本へも流出したようである。日本では京都大学の濱田耕作博士が俑研究の嚆矢的存在として知られているが、俑の編年観のほとんど確立していない状況で、しかも年代及び出土地が不確かな将来資料によって「六朝俑」の特質を考察し、その中から仏教造像との類似性など重要な指摘を早くにしているという点は特筆される<sup>4)</sup>。また、当時日本で蒐集された俑の中には現在洛陽北魏陶俑に比定され得るものも一部に含まれている<sup>5)</sup>。ただし、当時の資料については、一般的に出自の不明なものがほとんどで、正式な考古学的発掘による出土資料と詳細に比較しながら、真贋の問題も含め今後慎重に検討する必要がある。

中華人民共和国成立後、中国では学術的な考古発掘が飛躍的に増え、それに伴い確実な出土資料を用いての俑研究が可能となり始めた。日本では戦後、佐藤雅彦氏の一連の陶俑（氏は「土偶」の表現を用いる）研究が良く知られており、陶磁史研究の一ジャンルとしての俑の位置を確立した点大いに評価される<sup>6)</sup>。この段階では、洛陽北魏陶俑の出土例がまだ十分とはいえなかったが、佐藤氏の論考には現在でも示唆に富む点が多い。1980年から90年代になると洛陽北魏陶俑の出土例が増した。それに伴い、北朝の俑全体をはじめ

体系的に論じ、洛陽北魏陶俑の位置づけを明確にしたという点で楊泓氏の功績は高く評価されるべきものといえる<sup>7)</sup>。

楊泓氏は北魏俑を「西晋の陶俑の基礎を継承し、さらに北方文化の特色という新たな要素を反映して、それらを融合発展させて、新たな俑の規範を生み出したもの」とした<sup>8)</sup>。そして、孝文帝の漢化政策による喪葬制度を反映した洛陽北魏陶俑の新たな規範を代表するものとして元邵墓出土の陶俑が位置づけられた。洛陽北魏陶俑の中でも比較的早い時期に発見された元邵墓出土の陶俑群は、洛陽北魏陶俑の代表としてこれまでもしばしば紹介されており、ほぼ同時期とされる王温墓など同一様式ともいえる陶俑の発見もあり、これらが北魏洛陽時代を代表する陶俑であるという認識が現在主流となっている<sup>9)</sup>。しかしながら、北魏も終わりに近い最末期の元邵墓をもって洛陽北魏陶俑全体を語るにはやや問題があると思われる。とくに洛陽北魏陶俑の成立という問題を考える場合、元邵墓以前の陶俑についても注目する必要がある。

一方、従来から指摘されていた仏教彫塑と陶俑との関連についても、より具体的な比較研究が必要と思われ、その意味で最近の八木春生氏の論考は、仏教造像との関連を踏まえて彫刻史の立場から陶俑を考察したものとして注目される<sup>10)</sup>。

本稿ではこうした問題を踏まえながら、主として造形的な観点に主眼をおいて考察を進めて行く。そこでまず紀年墓の出土例を中心に、洛陽北魏陶俑の変遷とその特徴を具体的に見ていきたい。

### 3. 洛陽北魏陶俑の特徴—紀年墓出土例を中心に

北魏洛陽遷都後の陶俑は、紀年墓の出土例がいくつか知られ、その変遷がある程度迎えられるようになった。陶俑出土の紀年墓は、孝明帝の熙平(516-518)、正光(520-525)、孝昌(525-527)年間が最も多く、他に孝荘帝の建義(528)年間、孝武帝の太昌(532)年間のものなど計11基が正式に報告されている。そのうち、洛陽一帯の墓は計6基あり、それ以外は河北、山東、陝西

など近隣地域のものである(表)。

洛陽遷都後、とくに宣武帝の在位期間(499-515)を中心とする最初の約15年間に製作された陶俑は現在まで発見されていない。北魏洛陽城の建設が遷都後から景明2年(501年)まで続いたということもあり、陶俑をはじめとした明器の製作機構もこの間はまだ十分に整備されていなかった可能性が考えられよう。いずれにせよ、現在この期間は洛陽北魏陶俑の空白時期となっている。

これまで発見された最も早い時期の洛陽北魏陶俑は、宣武帝延昌3年(514年)に卒し、孝明帝熙平元年(516年)に遷葬された元睿墓<sup>11)</sup>出土のものである。元睿墓を筆頭に孝明帝の在位期間(515-528)は、洛陽のみならず北魏陶俑の発見例が最も多い時期ということから、この時期に陶俑の製作機構がようやく本格的に機能し出したということができよう。

#### (1) 元睿墓(偃師県杏園村) 熙平元年(516年) 遷葬

出土した陶俑は14体であり、平城時代に比べると陶俑の出土数が極端に少ないことが分かる。陶俑の製作技法についても元睿墓は平城時代のものとは異なる。平城時代の陶俑は頭部と体軀を一体とする合模制であったが、元睿墓出土のものは体軀の側面観が比較的薄く、背面がほとんど扁平であることなどから、基本的には一枚の型による単模制で、内部は無垢であると考えられる〈図3〉<sup>12)</sup>。そして、頭部は別に製作したものを体軀に挿入する形をとっている。この頭部別製は元睿墓のみならず洛陽遷都後の北魏陶俑の特徴の一つといえる。

元睿墓の俑の中でも扶剣武人俑〈図4〉は、その下半身が極端に短いアンバランスなプロポーションに成形されている点は造形的に注目される。両足の表現の不自然さという点では小冠を戴いた文吏俑〈図5左〉も同様である。この文吏俑の体軀は膝の辺りまでしかつくられておらず、膝から先の部分は別につくったものを付け足す形であり、しかもそのつくりは体軀に比してかなり稚拙であり、手づくねによるものと思われる。文吏俑でも頭髪を巾で束ねるタイプのもは膝から先が欠けた状態で出土しており、同様に足先は別製にしていたと考えられる〈図5右〉。女侍俑など他のものは足先まで体軀

表 洛陽遷都後の北魏陶俑一覽

	被葬者	年代	所在地	被葬者官号	俑・鎮墓獸	報告等
1	元叡 (YDIIM914)	延昌3年 (514年)歿 熙平元年 (516年)遷	河南省偃師県杏 園村	平遠將軍洛州刺 史	〈陶俑14〉文吏俑6、扶 劍武人俑1、執盾武人 俑2、男侍俑1、女侍俑4 〈鎮墓獸〉	考古91-9
2	邵真 (M229)	正光元年 (520年)	陝西省西安西郊 任家村	阿陽令狩假安定 太守	〈陶俑8〉武人俑2、拱 手男俑3、拱手女俑3 〈鎮墓獸2〉獸面形2	文參55-12
3	侯掌 (C10M22)	正光5年 (524年)	河南省孟津県邙 山号三十里鋪村	本國中正奉朝請 燕州治中從事史 上谷	〈陶俑12〉武人俑2、男 胡俑4、男俑5、女俑1 〈鎮墓獸2〉人面形1、 獸面形1	文物91-8
4	高氏	正光5年 (524年)	河北省曲陽県党 城公社嘉峪村	「持節征虜將軍 營州刺史長岑 侯」韓賄の夫人	〈陶俑6〉武人俑2、胡 俑2、女俑2 〈鎮墓獸2〉人面形1、 獸面形1	考古72-5
5	甄凱	正光6年 (525年)	河北省無極県北 蘇郷史村		〈陶俑1〉	考古72-5
6	賈思伯・夫人 劉氏	孝昌元年 (525年)	山東省寿光県城 関鎮李二村	散騎常侍、尚書 右僕射、使持節 東將軍、青州使 君	〈陶俑4〉男俑2、女俑2 〈鎮墓獸1〉人面形1	文物92-8
7	崔鴻・夫人張 玉拾 (M1)	孝昌2年 (526年)	山東省徑博市臨 徑区大武公社窩 托村	使持節鎮東將軍 督青州諸軍事度 支尚書青州刺史	〈陶俑15〉女仆俑5、侍 衛俑6、文俑2、武人俑2 〈鎮墓獸1〉	考古84-2
8	元乂	孝昌2年 (526年)	河南省洛陽市朝 陽（前海資村）	使持節中驃騎大 將軍儀同三司尚 書令冀州刺史江 陽王	〈陶俑・瓦俑〉60以上	洛陽出土 石刻時地 記 文物74-12
9	染華 (90YCXM7)	孝昌2年 (526年)	河南省偃師県杏 元村	鎮遠將軍射声校 尉	〈陶俑31〉武人俑2、侍 吏俑4、儀仗俑5、男侍 俑4、女侍俑2、樂俑7、 舞俑3、執箕俑1、執盆 俑1、抱瓶俑1、燒火俑1 〈鎮墓獸1〉人面形1	考古93-5
10	元邵	建議元年 (528年)	河南省洛陽市盤 龍塚村	侍中司徒公驃騎 大將軍定州刺史 常山文恭王侍中 司徒公、驃騎大 將軍、定州刺史 常山文恭王	〈陶俑115〉文吏俑9、 扶盾武人俑1、武人俑2、 持盾俑16、鎧馬武人俑 8、騎馬鼓吹俑4、騎從 俑2、擊鼓俑3、籠冠侍 吏俑1、侍俑42、半浮 甍侍俑4、牽馬俑1、伎 樂俑6、舞踊1、仆俑4、 長衣俑2、童俑1 〈鎮墓獸2〉人面形1、 獸面形1	考古73-4

11	王温 (C10M68)	太昌元年 (532年)	河南省洛陽孟津 県北陳村	使持節撫軍將軍 瀛州刺史	〈陶俑62〉鎮墓武人俑2、 武人俑7、騎馬武人俑4、 男侍俑36、女侍俑1、 伎樂俑5、披袈俑4、跪 坐俑2、思惟俑1 〈鎮墓獸2〉人面形1、 獸面形1	文物95-8
12	無名氏 (YD11M1101)	洛陽遷都 後	河南省偃師県杏 園村		〈陶俑1〉武人俑1	考古91-9
13	無名氏 (WLM1)	北魏洛陽 遷都後	河北省滄州地区 呉橋県羅屯		〈陶俑22〉武官俑12、 武人俑2、女俑6、俑頭 2(男俑1、女俑1) 〈鎮墓獸2〉人面形1、 獸面形1	文物84-9
14	無名氏 (89YNLTM4)	北魏洛陽 遷都後	河南省偃師県南 蔡庄連体磚廠		〈陶俑16〉武人俑1、文 吏俑1、右袒男侍俑1、 女侍俑10、跪坐俑2、 女騎俑1 〈鎮墓獸1〉人面形	考古91-9
15	無名氏 (90YNLTM2)	北魏洛陽 遷都後	河南省偃師県南 蔡庄連体磚廠		〈陶俑74〉武人俑6、持 盾武人俑4、鎧甲武人 俑8、鎧馬武人俑3、儀 仗俑27、風帽俑5、鼗 鼓俑4、吹簫俑1、披袈 俑7、籠冠侍吏俑4、螺 髻女侍俑2、騎馬俑9 〈鎮墓獸2〉人面形1、 獸面形1	考古93-5

[凡例]

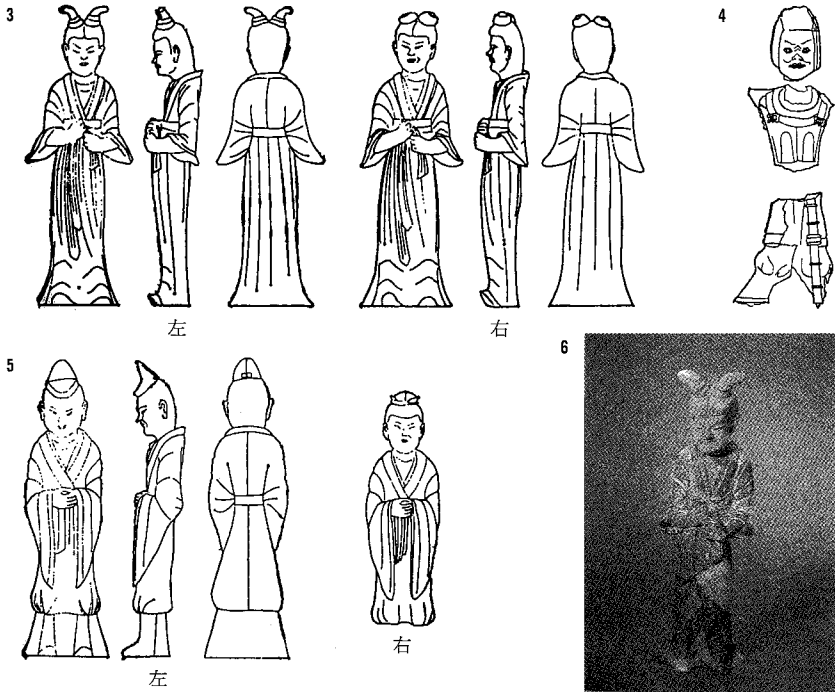
文参：『文物参考資料』

考学：『考古学報』

洛陽出土石刻時地記：郭玉堂、王廣慶『洛陽出土石刻時地記』大華書報社、1941年（民国30年）

とともに一体で表現しているにもかかわらず、なぜ文吏俑だけが膝から先の部分をあえて別につくったのか不明だが、こうした比較の手間のかかる製作方法や出土した俑の少なさなどから、元睿墓の陶俑は型づくりを基本としながらも大量生産がほとんど意識されていなかったことが分かる。

女侍俑では角が2本出たような「双丫髻」のものが見られるが、これは当時の未成年女子の一般的な髪型であったと指摘されている〈図6〉<sup>13)</sup>。また、両袖口が三角にやや突き出る点や、ゆるやかに湾曲しながら垂れる帯の表現など、女侍俑には特徴的な服装表現が見られる。衣文線や両手の細部表現などは型抜きした後に1点1点施されたようであり、型によるとはいえ思いの他手間を掛けて製作されている点は注意を要する。



女侍俑と文吏俑の服装はいわゆる褒衣博帶の漢民族式服制であり、孝文帝に始まる一連の漢化政策の一つでもある服制改革、すなわち胡服の着用の禁止による漢民族式の服装への転換が、洛陽遷都後の陶俑に大きく反映されていることが元睿墓の俑からはっきりとうかがわれる。

なお、鎮墓獸も出土したが、破損がひどく復元不可能であったという。また鎮墓武人俑に該当するものは見当たらず、鎮墓俑についての詳細は残念ながら不明である。

現在までの出土例から見ると、元睿墓の俑は洛陽北魏陶俑の最初期の作例と考えられる。基本的には単模制であり、造形のアンバランスさや稚拙さなども一部に見られることから、まだ完全には規格化されていない試行錯誤の段階にあったのではないかと考えられる。



(2) 侯掌墓(洛陽市孟津県) 正光5年(524年)

陶俑は計12体出土しており、元睿墓同様に比較的少ない。2体の武人俑は高さ35cmで、他の俑がいずれも20cm以下であるのと比べて一際大きくつくられていることから、鎮墓武人俑と考えられる〈図7〉。兜をかぶり、褌襜鎧をつけており、左手を腰のあたりで前に伸ばす格好だが手の先までは表現されていない。これはおそらく元來盾を持っていたか、あるいは別製の手をつけたためであろう。頭部は欠損しているがほぼ同寸同型の武人俑が洛陽偃師杏園村北魏墓(YDIIM1101)<sup>14)</sup>や偃師南蔡庄北魏墓(89YNLTM4)<sup>15)</sup>からも出土している。また、鎮墓獸は人面形と獸面形のペアで、前肢を突っ張り蹲坐する形をとり、背中には本来鬣のような角状の突起が3本あったという〈図8〉。特殊な武人俑2体と人面形と獸面形一対の鎮墓獸という鎮墓俑の組み合わせは平城時代にすでにその萌芽が見られるが<sup>16)</sup>、侯掌墓の鎮墓俑の基本的な造形は細部形式にそれぞれ変化はあるものの、その後の洛陽北魏陶俑、さらには東魏、北齊時代の俑へも受け継がれていく。

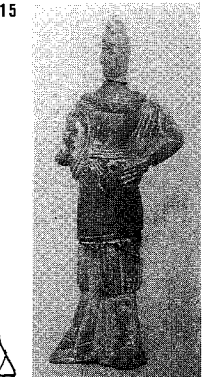
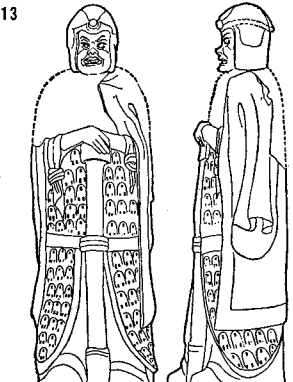
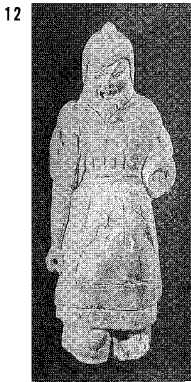
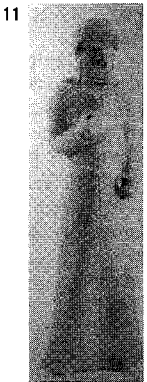
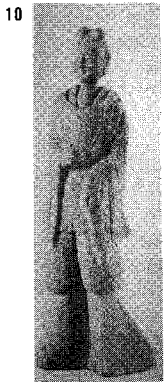
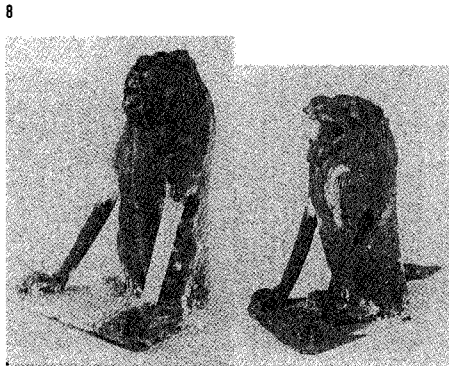
出土した陶俑はいずれも前面の型のみによる単模制で、背面が平らであることから本来墓室の壁に貼り付くように立っていたと考えられている<sup>17)</sup>。いずれも頭部が比較的小さく、また裾拡がりの下裳表現をとることもあって非常に安定感のある均整のとれたプロポーションを見せており、元睿墓に比べて造形的に一層洗練さが増している。しかも、武人俑〈図7〉や女俑〈図9〉、男俑〈図10〉などは体を「く」の字状にややくねらせ、それに併せて裳裾も片方にややたなびくという、一種の動きが意識されている点が特徴的である。姿態や衣文表現に見られる動感は、神亀2年(519年)から正光元年(520年)の製作とされる北魏洛陽永寧寺塔基出土の塑像群や、龍門石窟や麦積山石窟などの北魏後期窟の供養者像とも合い通じるものがあり、侯掌墓の陶俑の造形的な源泉が同時期の仏教塑像にあることを窺わせる点興味深い。また、男胡俑〈図11〉では腹部のふくらみや両足など衣服を通しての肉体表現や写実的な顔貌表現など、型づくりを基本にしながらもより完成度の高い人形造形を目指して、丁寧な仕上げ調整が行われていることも特筆される。後の元邵墓のように100体を越える程の量産はまだこの段階では見られないことから、型製作とはいえこのようなより一品製作に近い形の精緻な造

形の陶俑が可能になったともいえよう。

河北省曲陽県の高氏墓<sup>18)</sup>も侯掌墓と同じ正光5年(524年)の紀年墓である。高氏墓出土の武人俑〈図12〉、女俑そして鎮墓獣は侯掌墓のものと極めて類似した特徴を有しており、同じ型とはいえないまでも、洛陽で製作されたものがもたらされた可能性が高い。さらに、孝昌2年(526年)の山東省淄博市臨淄の崔鴻夫妻墓や同じく山東省寿光県の孝昌元年(525年)の賈思伯夫妻墓、さらに河北省吳橋北魏墓(WLM1)からも侯掌墓の武人俑と男俑に類似した造形の陶俑が出土している<sup>19)</sup>。以上のことから、侯掌墓出土の陶俑は、洛陽北魏陶俑でも比較的早い時期、すなわち520年代中葉に規格化された様式を代表するものであり、それが洛陽以外の近隣諸地域の陶俑へも大きな影響を与えていたことが分かった。したがって、北魏洛陽の陶俑の製作機構が520年代中葉にはほぼ確立したと考えることができよう。

### (3) 元冢墓(洛陽市朝陽) 孝昌2年(526年)

1941年(民国30年)に著された『洛陽出土石刻時地記』には、洛陽前海資村(現朝陽)東南の大墳丘内から1925年に元冢の墓誌と陶器数百点が出土したという記述があり、陶器のうち「文武陶俑、瓦俑及び瓦馬」が最大であったという<sup>20)</sup>。1935年にはさらに60体の陶俑が見つかっている。したがって、元冢墓にはかなり大量の陶俑が随葬されたと考えられ、この出土数の多さという点でこれ以前の洛陽北魏陶俑と明らかな違いを見せている点は注意される。さらに出土した「文武陶俑、瓦俑及瓦馬最大」という点、どの程度大きかったのかは不明だが、あるいは後で述べる高さ72cmにも及ぶ伝洛陽出土の大型陶俑のようなものを指すのかもしれない。いずれにせよ、元冢墓はこれまで発見された北魏墓の中で最大規模との指摘もあることから<sup>21)</sup>、当然そこに埋葬された陶俑もその時期を代表する指標となるものであったと想像されるが、残念なことにその実体は全く不明である。しかし、同じ孝昌2年(526年)ということで、次に見る染華墓の陶俑は、元冢墓の陶俑を類推する一つのヒントになるかもしれない。



#### (4) 染華墓（偃師県杏元村） 孝昌2年（526年）

出土した陶俑は31体であるが、早くに盗掘の被害を受けていたことから、本来はさらに多かったと見るべきであろう。染華墓の陶俑も型によってつくられているが、前述の侯掌墓以前の陶俑で見られた単模制のものに加え、合模制のものも新たに登場した点が特筆される。この製作方法の違いによって、必然的に俑の体軀に薄いもの（単模制）と厚いもの（合模制）の2種類が見られることになり、単模制では基本的には平らであった背面が、合模制では造形的に明確に意識されてつくられるようになった。合模制はすでに北魏平城時代にも見られたが、洛陽時代の合模制では頭部を別製にして後から体軀に挿入する方法をとる点が前者とは大きく異なり、より手の込んだつくりであると言える。

さらに、染華墓出土の合模制の陶俑には、これまでほとんど見られなかった種類のもが見られる点も注目される。例えば、剣を按じて外衣（マント）をはおり袖の端を結んで垂らす格好の武人俑〈図13〉や様々の雑事をこなす一連の坐形の侍女俑〈図14〉などが染華墓で新しく登場したものである。そしてこれらとほぼ同一形式の陶俑が後述する元邵墓においても見いだせることから、染華墓で登場した合模制の陶俑がそれ以後の陶俑の一つの基準となっていく可能性を示唆している。

一方、従来から見られた単模制による陶俑においても、染華墓では新たな趣向が見られる。すなわち、後ろ向きに表現された2種類の「舞俑」である〈図15、16〉。いずれも躍動的な姿を表現するための一つの手段としてあえて背中を向ける格好で表現したと考えられ、前述の侯掌墓などの陶俑に見られた動きの表現の延長線上に位置づけられるものかもしれない。なお、時代はやや下るが、北齊河清2年（563年）銘の造像碑<sup>22)</sup>上には染華墓出土の「舞踊（Ⅲ式）」〈図16〉とほぼ同じ姿態の胡人像一対が見られるが、造像碑全体の構成から見て舞踏像とは考えにくく、したがって染華墓の「舞俑」という比定については今後検討の余地がある。

いずれにせよ、染華墓出土の陶俑は、従来の単模制の陶俑に加え、合模制による新しい種類の陶俑が登場したという点と、俑全体の埋葬数が増えたという点で洛陽北魏陶俑の展開において一つの重要な転換点であったというこ

とができる。そして、染華墓の陶俑のこうした新たな展開は、同年代という点と陶俑の埋葬数の多さという点、さらには官位の高さを背景にした墓葬規模の大きさなどから考えて、先の元父墓の陶俑にも更に顕著に反映されていたであろうことは想像に難くない。侯掌墓の正光5年(524年)から元父墓や染華墓の孝昌2年(526年)まではわずか2年間ではあるが、この間は洛陽北魏陶俑の展開において重要な時期であったといえる。

#### (5) 元邵墓(洛陽市) 建議元年(528年)

かつて盗掘に遭っているものの、出土した陶俑は合計115体と洛陽北魏陶俑の中では現時点で最多であり、俑の種類や構成を考える上でもこの時期の一つの基準となるものである。元邵墓出土の陶俑はほとんどが染華墓でも一部見られた合模制によるもので、わずかに「半浮彫侍俑」が単模制による。しかし、単模制と合模制の割合は染華墓とは一転して合模制が大半を占めており、合模制が単模制に取って代わった状況が理解できる。すでに染華墓でもその萌芽が見られた単模制による正面観の重視から合模制による立体的人物表現への志向という意識の転換がここにおいて確固たるものとなったといえ、これは別の面から見ると新たな造形的規範にもとづいた陶俑生産体制の確立と捉えることができよう。

元邵墓では陶俑の出土数の多さに伴い、造形的な変化や新たな種類の俑も登場した。例えば、鎮墓武人俑では従来主流であった襦襜鎧から明光鎧へと甲冑の型式が変化し、さらに左手に長盾を案じるという格好になっているおり、これは続く東魏、北齊にも基本的に継承されていく(図17)。また、種々の騎馬俑が数多く出土していることや、染華墓ですでに登場した胡服を着た武人など、平城時代に中心的であった北族文化の要素も次第に目立つようになってきた。単模制から合模制へと製作技法が変化したことに伴う、肉感的な人物表現への志向も、一面では孝文帝による一連の漢化政策に伴う「秀骨清像」式から、鮮卑族をはじめとした北方民族特有の豊満で堂々とした体格への志向という、いわば人物表現の理想像の変化と捉えることも可能であろう。それはいうなれば従来の漢化政策の反動ともいえる鮮卑文化の復権であろう。こうした鮮卑文化への志向は後の北齊時代、とくに晋陽一帯の

陶俑においてより顕著に見られることになる<sup>23)</sup>。

元邵墓ではまた、染華墓でも見られた坐形の侍女俑に加え、坐形の伎楽俑も登場した。さらに、胡人俑の表現は秀逸で、中でも「童俑」〈図18〉の膝を抱えて眠る様など、すでに指摘があるようにこの時期の陶俑がすでに心理描写に巧みであったということの好例の一つといえる<sup>24)</sup>。「胡人」といっても広い意味を有しているが、一連の洛陽北魏陶俑に見られる胡人俑（胡俑）は、北魏王室の鮮卑拓跋族ではなく、むしろ西方（西域）の人々を表現したものといえる。実際、この時期ソグド人の商人はじめ西アジアからの来朝者も多く、洛陽には多くの西域胡人が住んでいたという。そして、「長衣俑」〈図19〉に見られる胡人が左手を袖の中にしまい胸前に置く所作は、ペルシャ系民族の恭順の所作とも考えられ<sup>25)</sup>、褒衣博帯の漢民族式服装の侍俑に同様の所作をとるものが多いというのも、そうした西方文化の影響の一つと考えられる。元邵墓の陶俑には民族的な多様性が見られるという点がすでに指摘されているが<sup>26)</sup>、この背景にはそうした当時の洛陽の国際色溢れる文化が指摘できよう。

以上、元邵墓は染華墓でその萌芽が見られた陶俑の新たな規範——すなわち単模制から合模制への製作技法の変化と俑の埋葬数と種類の増加——がさらに確固たるものとなったことを如実に反映している。

#### （6）王温墓（洛陽市孟津県）大昌元年（532年）

合計62体の陶俑が出土した。以前に盗掘に遭っていることから、元邵墓同様、本来さらに大量の陶俑が随葬されていたことが推測される。陶俑は元邵墓同様合模制によるものがほとんどである。しかし、とくに鎮墓武人俑〈図20〉など元邵墓のものと比べると頭部の比較的大きなプロポーションへと変化していることに気づく。頭部が小さくすらりとした長身瘦軀の体型から徐々に頭部がやや大きめのがっしりとした体型へとという変化の兆しは、後に東魏、北齊へとなるにしたがって更に顕著になっていく。したがって、王温墓の陶俑は、まさに洛陽北魏陶俑の最末期の様相を示しているといつて間違いない。

なお、染華墓、元邵墓でも見られた坐形侍女俑がここでも出土しており、



17



18



19



20



21

しかも披帛を胸前で結ぶという格好は元邵墓の侍女俑でも見られたものでこの時期の流行であったのかもしれない。また、「思惟俑」〈図21〉は立て膝に右手を頬にあてて眠っている胡人の姿を表現しており、元邵墓の「童俑」と格好こそ違え、共通の造形感覚と趣向を感じさせる。なお、鎮墓武人俑をはじめとして偃師連体磚廠2号墓（90YNLTM2）<sup>27)</sup>出土の陶俑は王温墓の陶俑と造形的に数多くの共通点があり、同範の可能性も考えられる。

#### 4. 洛陽北魏陶俑に関する諸問題

前項では紀年墓出土の洛陽北魏陶俑を考察しながら、その特徴と変遷を辿ってきた。その結果を簡単にまとめると以下ようになる。

- 1) 単模制の陶俑の登場
- 2) 単模制から合模制への制作方法の変化
- 3) 孝昌年間以降の量産化と生産体制の確立

従来は、洛陽遷都後の陶俑は、一括して「北魏後期」の陶俑として扱われてきたが、今回単模制が主流となる比較的早い時期（516年-524年頃）と合模制が主流となる時期（526年-532年頃）の大きく二つの時期に分けられること

が明らかになった。単模製の段階では北魏前期の平城時代と比較して俑の出土数が比較的少なく、合模制が主流となる時期では俑が比較的大量に出土するようになっているが、技術的に合模制が単模制より量産に適しているとは必ずしもいえない。例えば、西安一帯の西魏、北周の陶俑は単模制による量産を行っており、それらのつくりの粗さは単模制を量産の手段としたことを如実に示している。しかし、洛陽北魏陶俑の場合、単模制が量産の手段として採用されたのではないことはすでに見た陶俑の出土数の少なさなどから明らかである。加えて、平城時代の北魏俑はほとんどが合模制（北魏後期の合模制とは頭部と体軀を一体にしている点で大きく異なる）を採用しており、俑の出土数も100体前後と比較的多いということを考慮すると、初期の洛陽北魏陶俑がなぜ単模制を採用し、しかも俑の出土数が比較的少ないのかという点がまず問題である。そして単模制から合模制へと変化し、それに伴い量産化へと向かう背景と原因も大きな問題である。ここではまずその2点の問題について考察し、さらにこれまであまり注目されることのなかった大型の洛陽北魏陶俑の問題について最後に触れたい。

### （1）なぜ単模制か——単模制登場の背景

初期の洛陽北魏陶俑が、平城時代には見られなかった単模制という新しい製作方法を採用したということは、すでに述べたように平城時代の北魏俑との直接的な影響関係が無かったことを改めて裏づけるものといえる。さらに言えば、北魏平城時代とは異なる工人達が初期の洛陽北魏陶俑の製作に携わったであろうことも想像に難くない。では、なぜ単模制という方法が当初採用されたのであろうか。初期の洛陽北魏陶俑の単模制は大量生産を主要な目的としたものでないことはすでに指摘したとおりであり、単模制は別の理由から採用されたと考えられる。そこで、単模制によって得られる造形的特徴に目を転じて見たい。単模制による洛陽北魏陶俑は背面が平らで、一部簡単な衣文が施されることはあっても、造形的に背面はあまり意識されていない。こうした背面をほとんど意識せずに正面観を重視する点から、いわゆる「正面観照性」という特徴を指摘することができる。同様の特徴は後で述べる石人にも見られることから、この時期の造形的な嗜好ということもできるのか



もしれない。

俑に見られるこの「正面観照性」の問題は一面では墓葬内での配置の問題とつながってくる。単模制の俑は、背面が平らであることから本来は墓室の壁面に貼り付け（あるいは立てかけ）られていたのではないかとの指摘があるが、実際単模制の俑は墓内に単独で立てて置くにはあまり安定が良くない。さらに、より重要と思われる点は、その見え方である。壁に貼り付けられているにせよ、単に立てかけられているにせよ、壁を背にするその姿は、浅浮雕りや影塑（塑像による群像表現）と同様の効果を見るものに与える。元来は塔内部の壁面に貼り付けられていたという洛陽永寧寺塔基出土の小型の仏教塑像群については、洛陽北魏陶俑との類似性がすでに指摘されているが、両者の類似は単に表現形式の点だけではなく、そうした設置方法という点でも一脈通じるところがあるといえよう<sup>28)</sup>。また、洛陽北魏陶俑はほとんどが頭部を体軀とは別に製作していることはすでに指摘したが、このような「頭体別式」は永寧寺や麦積山石窟など北魏塑像の基本であったとの指摘も陶俑と塑像との密接な関連を示唆している<sup>29)</sup>。実際、永寧寺の塑像群は、神亀2年（519年）から正光元年（520年）というその製作年代から、初期の洛陽北魏陶俑の成立を考える上でも重要な比較資料といえる。

したがって、初期の洛陽北魏陶俑が単模制を採用した背景には、永寧寺をはじめとした寺院などの塑像に代表される同時期の仏教塑像の影響を指摘することが可能であろう。

さらに壁面に貼りつける（あるいは立てかける）ことを前提に陶俑が製作されたとなると、当然墓室の壁面は限りがありその数も制約される。初期の洛陽北魏陶俑の場合、その出土数が少ないというのはそうした単模制に伴う配置の問題とも関連していると理解することが可能かもしれない。

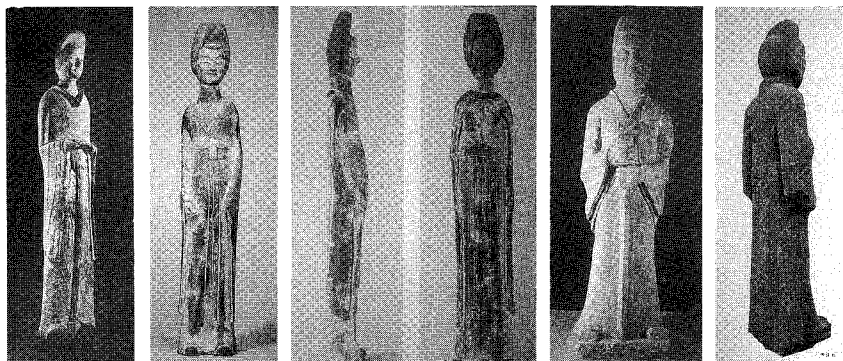
## （2）量産化の背景——単模制から合模制へ

正光5年（524年）の侯掌墓までは洛陽北魏陶俑では単模制が主流であったが、わずか2年後の孝昌2年（526年）の染華墓では単模制に加え合模制が登場し両者が並存する状況となり、さらに建議元年（528年）の元邵墓になると、合模制が主流となった。この製作方法の変化の背景として、彫塑と

しての正面観照性から立体的な造形へという人物表現に対する意識の転換ということが指摘できる。そして、このことはさらに孝文帝による一連の漢化政策に伴う「秀骨清像」式の人物から、豊満で恰幅の良い鮮卑式人物へと、理想とする人物像が徐々に変化し始めた兆しとして捉えることも可能であろう。

こうした製作方法の変化に伴い陶俑の量産が本格化し始めたという事実は、単模制から合模制への転換を考える上で一つの大きな鍵となる。先に単模制による俑の配置の問題と埋葬数の少なさの関連について述べたが、合模制の場合、染華墓や王温墓のように墓室内に一群として比較的整然と配置されている。こうした大量の俑の副葬という点では当然一種の厚葬化という捉え方もできる。実際、北魏分裂後の東西魏、北周、北斉では大量の陶俑の副葬がさらに活発化していることから、副葬する陶俑の大量化の傾向は確かに認められる。

一方、合模制による量産は一つの墓における大量の俑の副葬というだけでなく、多くの墓への俑の供給ということも想定される。すでに指摘したように同型に近い例もいくつか存在し、また八木氏が述べているように型の使いまわしと作り置きという状況も確かに存在していたと考えられる<sup>30</sup>。孝昌2年(526年)の染華墓では合模制と単模制がまだ並存しており、建義元年(528年)の元邵墓で合模制がほぼ主流となる状況を見ると、この間に合模制を中心とする生産体制がほぼ完全に出来上がっていたということができよう。北魏末の武泰元年(528年)に起こったいわゆる「河陰の変」では諸王貴族等が大量に殺戮されたことは有名である。元邵もまさにその中の一人であり、元邵墓における大量の陶俑の埋葬は、そうした合模制を中心とした新たな陶俑の量産体制の確立を背景に可能となったということが出来る。言い換えれば、「河陰の変」によって大量の墓の造営が行なわれたにもかかわらず、かえって陶俑が量産されているという状況は、安定した陶俑の供給体制がすでに出来上がっていたということを物語っており、「河陰の変」という一大事件は陶俑の量産化を阻害する要素とはならず、むしろかえってそれを促進したとさえいえるのかもしれない。



22

23

24

25

26

### (3) 大型俑をめぐる問題——石人との関連

1955年に中国で出版された秦廷域編『中国古代彫塑芸術』（中国古典芸術出版社）に洛陽出土とされる興味深い北魏俑が数点掲載されている。中でも目を引くのが「按劍侍臣」俑であり、高さ72.0cmという洛陽北魏陶俑としては極めて大型のものである（図22）。なおかつ、その造形水準の高さは洛陽北魏陶俑を代表するものといっても過言ではない。洛陽北魏陶俑でこれほど大型の作例は近年の洛陽北魏陶俑の出土品では他に見当たらないが、洛陽北魏陶俑に比定される比較的大型の一群はすでに早くから知られている<sup>31)</sup>。その内の一つは先の例と異なり剣は按じていないが、やはり籠冠を被り、右手を垂らし、左手を袖手する格好をとり、なおかつ体軀背面が扁平でわずかに衣紋を線刻しただけの単模制であることが分かる（図23、24）。考古学的発掘に基づいた確実な類品の出土例がない現段階では、これら一群の俑については更に詳細な検討が必要であるが、すくなくとも70cm以上の大型の俑がつづく東魏や北齊でもわずかだが存在していることから<sup>32)</sup>、洛陽遷都後の北魏でもつくられていた可能性は否定できない。鎮墓俑が他の俑よりも大きくつくられていることから明らかなように、大きな俑は特殊な役割を担っていたと考えられる。先の按劍侍臣俑の姿態から想起されるのが、洛陽市郊外邙山公社上碧村の孝荘帝（在位528-530）の静陵（532年）に比定される古墳で出土した石人である（図25）<sup>33)</sup>。高さが3.14mもある巨大なもので、報告者は陵墓の前の神道両側に置かれる「翁仲」であろうとしている。同様の大

型の石人は宣武帝（在位500-515）の景陵（515年）からも出土しており（図26）、帯の表現は見られるが背面がほぼ平らである点は、先の洛陽北魏陶俑でも単模制のものを想起させる。石人は地上で陵墓を守護するものであるが、北魏の石人の発見例は極めて少なく、またそれが設置されるのも帝陵に限られるようである<sup>34)</sup>。先述した洛陽出土の大型北魏陶俑は、こうした石人と対応してか、あるいは石人に代わるものとして、墓内で墓を守護する目的でつくられたということも考えられよう。その意味からいえば、鎮墓武人俑や鎮墓獸といった鎮墓俑の一種とも考えられる。事実、大型俑の系譜は後の隋・唐時代まで続くが、隋以降は鎮墓俑の一つとして鎮墓武人俑、鎮墓獸とともに明らかにセットを形成するようになる<sup>35)</sup>。

最後に洛陽の大型北魏陶俑の年代であるが、単模制であるという点と一品製作を思わせるその完成度の高さから、元邵墓などの大量生産化以前の時期に置くことが可能であろう。

## 5. おわりに

洛陽遷都後しばらくの制作はなかったらしく、510年代に最初に現れた俑は平城時代に見られた合模制ではなく単模制による側面が扁平で瀟洒なスタイルのものであった。その背景に永寧寺をはじめとした仏教塑像の影響と当時の造形嗜好を見たが、平城時代に生産されたものとは全く異なる新たなスタイルの陶俑をつくり出した洛陽の工人達は、平城時代と同様に同時期の仏教造像を造形的な一つの指標としたといえる。とりわけ、同じ洛陽ということで、永寧寺塑像と洛陽北魏陶俑の類似性は注目される。永寧寺塔基出土の塑像の多くは塔内の壁面を飾るものであったというが、単に同じ世俗像の表現という以上に、両者の造形感覚には通じるものがあり、永寧寺塑像の神亀2年（519年）から正光元年（520年）という製作年代とその完成度の高さを考えると、洛陽北魏陶俑成立の背景には永寧寺塑像に代表される当時の仏教塑像の影響が考えられる。当時の陶俑製作の工房組織を解明する上でも、両者の具体的な比較研究が今後さらに必要と思われる。

従来、元邵墓の陶俑を洛陽北魏陶俑の代表とする認識が中心であったが、実際は、侯掌墓をはじめ元邵墓以前に単模制による陶俑群が存在しており、それらが洛陽北魏陶俑の初期の様相を反映したものであることが今回明らかになった。そしてあえて単模制という製作方法をとったのも明らかに量産ではなくそうした仏教塑像の表現形式を意図したものであったと考えられる。

一方、孝昌2年(526年)頃を境に単模制から合模制に製作方法が変化し、同時に量産化が進むという状況が判明した。有名な元邵墓出土の陶俑はまさにその時期の代表であることが分かった。北魏末期の武泰元年(528年)に起こったいわゆる「河陰の変」では多数の王侯貴族が殺され、それに伴い多くの墓の造営が必要になったと考えられるが、その犠牲者の一人でもある元邵の墓に見られた大量の陶俑は、すでにこの段階には陶俑の量産体制が確立していたことを物語っている。

単模制から合模制への製作技法の変化は単なる技術的な変化というよりも、理想とする人物像の変化、すなわち漢民族式の瀟洒なスタイルから鮮卑族式の豊満でがっしりとした体格への志向の転換と見るべきであろう。事実、俑の量産に伴い騎馬俑や胡服の俑など北方文化の要素を示す種類が増加しており、さらに鮮卑文化への指向は、続く東魏、北斉において一層顕著になっていく。鄴を都とした東魏の俑と洛陽北魏陶俑には、もちろん異なる点もあるが、一方で東魏の俑は洛陽北魏陶俑の伝統を継承しているとの指摘もあることから<sup>30)</sup>、両者の間には埋葬制度上のみならず造形的に断絶があるというわけではない。今回、いみじくも北魏末期に近い洛陽北魏陶俑に、東魏、北斉の陶俑の萌芽が見られたことは新たな発見であったといえよう。いずれにせよ、北魏滅亡後の東西魏の分裂に伴う、陶俑の変遷についても今後詳しく見ていく必要がある。

洛陽北魏陶俑については、最初期の様相や中国国外に現在所蔵されている資料の位置づけなど、現時点での考古学的発掘による出土資料だけでは解明できない問題もお多く残されている。今回、最後に触れた大型俑の問題もその一つであったが、今後の更なる出土資料の増加が期待される。また今回指摘した洛陽北魏陶俑と仏教塑像との関連については、永寧寺の塑像の発見によるところが大きい。今後は北魏塑像の研究も視野に入れながら、多角的

に洛陽北魏陶俑にアプローチしていく必要がある。

なお、脱稿後に元懌墓の壁画に関する概報が『文物』誌上に掲載されていることを知った(徐燁菲(洛陽古墓博物館 館員)「洛陽北魏元懌墓壁画」『文物』2002年第2期)。それによると、1992年の調査で彩繪陶俑頭部1点が出土したという。残念ながら体軀はなく単模制か合模制かは不明だが、小冠の型式などから元邵墓の「I式侍俑」などと近いものと思われる。ただ、頸部まで含んだ残高が9.8cmと比較的大きく、それから推測すると全体の高さは40cm程になると思われ、これまで出土した洛陽北魏陶俑の中では比較的大型のものといえる。孝文帝の第4子で「使持節侍中假黄鉞太師丞相大將軍都督中外軍錄尚書事太尉公清河文獻王」の官位を贈られた元懌は、正光元年(520年)に殺害され、胡太后の復権に伴い正光6年(525年)に大礼をもって改葬されたということから、本稿で触れた比較的大型の洛陽北魏陶俑の年代やその意義を考える上で貴重な資料であるといえる。

#### 注

- 1) 山西省大同市博物館、山西省文物工作委員会「山西大同石家寨北魏司馬金龍墓」『文物』1972年第3期。司馬金龍墓からは人面獸身形の鎮墓獸1体と、さらに胡人の形象の木俑も1体発見されている。なお、「俑」には動物模型も含む場合もあるが、ここでは純粹に人物像のみに限定して用いることにする。
- 2) 中国では前後2枚の型による方法を「合模制」(あるいは「双模制」と呼び、また1枚の型によるものを「単模制」(あるいは「半模制」という。本稿では以下便宜的にこれらの言葉を用いることにした。
- 3) 山西省考古研究所、大同市考古研究所「大同市北魏宋紹祖墓發掘簡報」『文物』2001年第7期
- 4) 濱田耕作「支那六朝の仏像と土偶」『国華』第406号、1924年
- 5) 中でも大正5年(1916年)頃から、早稲田大学の會津八一博士が蒐集した俑を中心とした明器コレクションは有名である(『早稲田大學會津博士記念 東洋美術陳列室図録 第一輯』早稲田大學會津博士記念 東洋美術陳列室、1978年；『會津八一コレクション 中国・漢唐美術展』毎日新聞社、1974年)
- 6) 佐藤雅彦『中国の土偶』美術出版社、1965年；『陶磁体系 第34巻 中国の土偶』平凡社、1972年；『陶磁・土偶』大阪市立美術館編『六朝の美術』平凡社、1976年
- 7) 楊泓「北朝陶俑の源流、演變及其影響」『中国考古学研究—夏鼐先生考古五十年紀念論文集』文物出版社、1986年
- 8) 前掲注7、271頁
- 9) 富田哲雄氏による最新の著作でも洛陽北魏俑については楊泓氏の論考をほぼ踏

- 襲している（富田哲雄『中国の陶磁 第二巻 陶俑』平凡社、1998年）。
- 10) 八木春生「南北朝時代における陶俑」曾布川寛、岡田健編『世界美術全集 東洋編 第3巻 三国・南北朝』小学館、2000年。また、安藤更生氏も早くから「非仏教彫刻と仏教彫刻を関係づけずに組織された古い彫刻史観は払拭されなければならない。」と述べている（安藤更生『中国美術雑稿』二文社、1969年、57-58頁）。
  - 11) 中国社会科学院考古研究所河南二隊「河南偃師県杏園村の四座北魏墓」『考古』1991年第9期
  - 12) 北京大学賽克勒考古與藝術博物館には、1931年に洛陽金村で出土したと伝えられる男侍俑が所蔵されているが、この男侍俑の体軀は元睿墓の女侍俑と極めて類似している。男侍俑は単模制による無垢のつくりで、平らな背面には衣文が線刻によって表現されており元睿墓出土の女侍俑をはじめとした陶俑についても単模制による無垢のつくりである可能性が高いと思われる。
  - 13) 曹者祉、孫秉根主編『中国古代俑』上海文化出版社、1996年、207頁（徐殿魁氏による解説）。同様の髪型は永寧寺塔基出土の塑像や北魏画像石棺上の線刻人物にも見出せる。
  - 14) 中国社会科学院考古研究所河南二隊「河南偃師県杏園村の四座北魏墓」『考古』1991年第9期
  - 15) 偃師商城博物館「河南偃師南蔡庄北魏墓」『考古』1991年第9期。この墓では武人俑以外はほとんどが合模制であり、しかも東魏以降に増加する肩脱ぎする格好の男侍俑が見られることなどから、墓葬年代は北魏遷都後でも比較的下と思われる。比較的早い時期の武人俑が残存したか、その型が使いまわされたものと考えられる。
  - 16) 拙論「隋俑考」『美術史論叢 造形と文化』雄山閣、2000年、注3
  - 17) 洛陽市文物工作隊「洛陽孟津晋墓、北魏墓発掘簡報」『文物』1991年第8期、57頁
  - 18) 河北省博物館 文物管理处「河北曲陽発現北魏墓」『考古』1972年第5期
  - 19) 山東省文物考古研究所「臨淄北朝崔氏墓」『考古学報』1984年第2期、寿光県博物館「山東寿光北魏賈思伯墓」『文物』1992年第8期、河北省滄州地区文化館「河北吳橋四座北朝墓葬」『文物』1984年第9期。なお、崔鴻、賈思伯いずれも洛陽で卒していることから、帰葬に際して洛陽の俑がもたらされた可能性もある。
  - 20) 郭玉堂、王廣慶『洛陽出土石刻時地記』大華書報社（排印本）、1941年（民国30年）
  - 21) 林聖智「中国北朝期の天文図試論—元父墓を例にして—」『研究紀要』第20号、京都大学文学部美学美術史研究室、1999年
  - 22) 韓自強「安徽亳縣咸平寺発現北齊石刻造像碑」『文物』1980年第9期
  - 23) 1997年7月12日に五島美術館で行われた東洋陶磁学会研究会での研究発表「北齊時代の俑について—その地域性と隋代への影響—」（『東洋陶磁学会会報』第34

号に要約掲載)。

24) 前掲注10

25) 「長衣俑」は、カール状の髪と髭をたくわえた「深目高鼻」(眼の彫りが深く、鼻が高いこと)の顔貌から、明らかに西方(イラン)系の人物であることが分かるが、ササーン朝やパルティアの作例中に、同様な左手袖手の所作を見出すことができる。田辺勝美氏によれば、「左手を袖の中に隠すのは、イラン系民族において身分の低い人間が身分の高い人物に接する場合にとるべき慣習であった」ということであり、さらにその理由について氏は「何故、左手を袖の中に隠したかという理由については断言はしかねるが、筆者の憶測によれば、イラン系民族は大便をした時、左手で直接拭くため、それで左手を不浄と見做したことに原因があるのではないかと思う。」と述べている(田辺勝美「ナルセー王叙任式浮彫に関する一考察—アナーヒター女神か王妃か—」田辺勝美・堀眺編『深井晋司博士追悼 シルクロード美術論集』吉川弘文館、1987年、101-136頁)。

26) 張乃翥・韓玉玲「北魏元邵墓出土文物的民族学研究」『北朝研究』1992年第3期。それによれば、出土した115体の陶俑をその文化形態で分類した結果、北胡系99体(86%)、中原伝統文化系13点(11%)、西域文化系3体(3%)の割合になるという。

27) 偃師商城博物館「河南偃師兩座北魏墓發掘簡報」『考古』1993年第5期

28) 中国社会科学院考古研究所洛陽工作隊「北魏永寧寺塔基發掘簡報」『考古』1981年第3期

29) 山崎隆之「永寧寺塔内塑像の製作技法について」『北魏洛陽永寧寺』(奈良国立文化財研究所史料第47冊)奈良国立文化財研究所、1998年

30) 前掲注10八木氏の作品解説31「雑役俑」379頁及び作品解説33「鎧甲武人俑」380頁

31) 川島公之氏によると大型の「北魏俑」は昭和10年代に10数体日本に将来されたという(川島公之「俑の魅惑 大地から目覚めた美」『目の眼』306号、2002年)。

32) 北齊文宣帝武寧陵に比定される河北省湾漳村北齊墓からは出土の高さ142.5cmにも及ぶ大文吏俑が2体出土している(中国社会科学院考古研究所、河北省文物研究所、鄴城考古工作隊「河北磁県湾漳村北朝墓」『考古』1990年第7期)。

33) 洛陽博物館 黄明蘭「洛陽北魏景陵位置的確定和静陵位置的推測」『文物』1978年第7期

34) 曾布川寛「作品解説26 石人」前掲注10『世界美術全集 東洋編 第3巻 三国・南北朝』377頁

35) 拙論「中国南朝陶俑の諸相—湖北地区を中心として—」『鹿島美術研究』(年報第20号別冊)財団法人鹿島美術財団、2001年

36) 蘇哲氏は「俑の顔と服飾が公式化しているので、すべて鄴城にある光祿寺東園局丞に属する工房で造られたものと思われる。その工人集団が534年遷都する際に洛陽から移って来たのであるから、北魏の造形遺風を受け継いだ。」と述べて



いる（蘇哲「東魏北齊壁画墓の等級差別と地域性」『博古研究』第4号、1992年）。

最後に成城大学大学院において長らく東山健吾教授に中国美術史の薫陶を受け、現在は東洋陶磁史を専門とする立場になった筆者にとって、彫塑史と陶磁史の接点である俑は生涯の研究課題の一つというべきものである。このたびの東山教授の退職にあたり、先生の学恩に対してここに深く謝意を記すとともに、拙論を捧げるものとする。

### 図版リスト

- 1 緑釉加彩武人 司馬金龍墓出土 高23cm（『中国陶俑の美』朝日新聞社、1984年、図48）
- 2 男俑 宋紹祖墓出土 高28.8cm（山西省考古研究所、大同市考古研究所「大同市北魏宋紹祖墓発掘簡報」『文物』2001年第7期、図二二）
- 3 女侍俑（2体）元睿墓出土 高21cm（左）、高20.8cm（右）（中国社会科学院考古研究所河南二隊「河南偃師県杏園村の四座北魏墓」『考古』1991年第9期、図二-1、2）
- 4 扶剣武人俑 元睿墓出土 頭部残高10.5cm（中国社会科学院考古研究所河南二隊「河南偃師県杏園村の四座北魏墓」『考古』1991年第9期、図二-6）
- 5 文吏俑（2体）元睿墓出土 高21.7cm（左）、残高17.5cm（右）（中国社会科学院考古研究所河南二隊「河南偃師県杏園村の四座北魏墓」『考古』1991年第9期、図二-5、3）
- 6 女侍俑 元睿墓出土 高21.2cm（曹者祉、孫秉根主編『中国古代俑』上海文化出版社、1996年）
- 7 武人俑 侯掌墓出土 高35cm（洛陽市文物工作隊「洛陽孟津晋墓、北魏墓発掘簡報」『文物』1991年第8期 図二九）
- 8 鎮墓獸（1対）侯掌墓出土 高24cm（左）、高18cm（右）（洛陽市文物工作隊「洛陽孟津晋墓、北魏墓発掘簡報」『文物』1991年第8期 図三三、三四）
- 9 女俑 侯掌墓出土（洛陽市文物工作隊「洛陽孟津晋墓、北魏墓発掘簡報」『文物』1991年第8期 図三二）
- 10 男俑 侯掌墓出土 高18.9cm（洛陽市文物工作隊「洛陽孟津晋墓、北魏墓発掘簡報」『文物』1991年第8期 図三一）
- 11 男胡俑 侯掌墓出土 高17cm（洛陽市文物工作隊「洛陽孟津晋墓、北魏墓発掘簡報」『文物』1991年第8期 図三〇）
- 12 武人俑 高氏墓出土 残高27.5cm（河北省博物館 文物管理处「河北曲陽発現北魏墓」『考古』1972年第5期、図版拾-1）
- 13 武人俑 染華墓出土 高29cm（偃師商城博物館「河南偃師両座北魏墓発掘簡報」『考古』1993年第5期、図四-2）
- 14 執盆俑 染華墓出土 高11.7cm（偃師商城博物館「河南偃師両座北魏墓発掘簡

- 報』『考古』1993年第5期、図五-11)
- 15 「舞踊（I式）」 染華墓出土 高18.9cm（偃師商城博物館「河南偃師兩座北魏墓發掘簡報』『考古』1993年第5期、図五-6)
  - 16 「舞踊（III式）」 染華墓出土 高15.9cm（曾布川寛、岡田健編『世界美術全集 東洋編 第3卷 三国・南北朝』小学館、2000年、図版32)
  - 17 持盾武人俑 元邵墓出土 高30.5cm（中国美術全集編輯委員会編『中国美術全集 彫塑編3 魏晉南北朝彫塑』人民美術出版社、1988年、図版一〇九)
  - 18 胡人俑 元邵墓出土 高9.5cm（曾布川寛、岡田健編『世界美術全集 東洋編 第3卷 三国・南北朝』小学館、2000年、挿図29)
  - 19 長衣俑 元邵墓出土 高15.3cm（洛陽博物館「洛陽北魏元邵墓』『考古』1973年第4期、図版玖-3)
  - 20 鎮墓武人俑 王温墓出土 高30cm（洛陽市文物工作隊「洛陽孟津北陳村北魏壁画墓』『文物』1995年第8期、表紙)
  - 21 思惟俑 王温墓出土（洛陽市文物工作隊「洛陽孟津北陳村北魏壁画墓』『文物』1995年第8期、図一二)
  - 22 按劍侍臣 洛陽出土 高72.0cm（秦廷域編『中国古代彫塑芸術』中国古典芸術出版社、1955年、図版13)
  - 23 灰陶加彩官人 高61.1cm（山口県立美術館『中国陶磁2000年の流れ』1985年、図版28)
  - 24 同上側面、背面
  - 25 石人 洛陽市邙山静陵出土 高310.0cm（曾布川寛、岡田健編『世界美術全集 東洋編 第3卷 三国・南北朝』小学館、2000年、図版26)
  - 26 石人 洛陽市邙山景陵出土（羅宗真主編『魏晉南北朝文化』学林出版社・上海科技教育出版社、2000年、図II-6)